



「国際誌エディターが教えるアク セプトされる論文の書きかた」

上出洋介 著

丸善出版, 2014年 5月

232頁, 2,000円 (本体価格)

ISBN 978-4-621-08690-2

本書は大学生協で現在最も売れている理工系の書籍の1つである。これまでも理工系の「論文の書き方」については、所謂“How-Toもの”の書籍が幾つもあった。タイトルを見ると本書も一見その類いに思えるが、実際に手に取ってページをめくれば、従来のものとは内容がかなり異なることが判るであろう。それは、本書の目次を見れば明らかである：

第1章：論文発表は研究者の義務

第2章：よい論文とは

第3章：論文の提出から採択まで

第4章：論文を書く基本から実際へ

第5章：英語論文の書きかた

第6章：レフェリーコメントへの具体的対処

第7章：まとめ

論文作成のテクニカルな側面は、第2～5章で随所に述べられている。また、「付録」には、日本人が間違えやすい英語表現の実例が多数列挙され、さらには査読者と著者とのやりとりの実例も示されている。しかし、本書の最大の特色は、理工系の学術誌に初めて論文を投稿しようとする大学院生を念頭に置き、研究論文を執筆することの本質的意義を説くとともに、第3章で学術誌の根幹を成す査読システムについて具体的に解りやすい説明に多くの頁を割いている点であろう。論文を執筆する側だけでなく、査読する側の観点からの記述の豊富さが特筆すべき特徴である。

まず、何故研究者は論文を発表し続けなければならないのかを著者は訴える。研究論文の数値化やそれを通じた研究評価の意味について様々な角度から論じながら、地球科学分野の複数の研究者の見解を具体的に引用しつつの主張には高い説得力がある。次に、研究論文とは如何に書かれるべきかについて述べられている。レポートと論文の違いから始まり、「良い論文」と「悪い論文」の対比を通じ、論文にて自らの主張を解りやすく読者に伝えることの重要性が説かれる。第4・5章では実際の論文執筆を想定し、その準備から

投稿までの各段階に応じた様々なアドバイスが記されている。その理解を深めるに当たり、第3章に査読システム全般の具体的説明がなされているのは効果的である。そして第6章では、投稿した論文への査読コメントへの対処について詳細に説明されている。これは投稿した論文を受理・掲載に至らせる上での関門だが、論文を初めて執筆する読者には想像し難いかも知れない。評者の経験から述べれば、一流誌の優れた査読者からのコメントには、著者が思いもしなかった誤解の可能性や著者の見過ごした観点からの解釈を指摘してくれるものが多く、コメントに真摯に向き合って改訂することで論文にさらに磨きをかけることができる。

本書の著者は名古屋大学名誉教授で、オーロラや地球磁気圏物理学の大家であり、400編以上の査読付学術論文を執筆してきた研究者である。そして、米国地球物理学連合 (AGU) の専門誌 Geophysical Research Letters や Journal of Geophysical Research の editor を10年余り務めた経歴の持ち主である。学術論文の著者としてのみならず、著名な国際学術誌の editor としての豊富な実績と経験に裏付けられているだけに、本書の内容は説得力が違う。よって、本書記載の具体的な実例は AGU の専門誌に関するものが殆どであり、気象学会の会員諸氏の投稿先として代表的な気象集誌や SOLA, あるいは米国気象学会の専門誌のケースとは異なる箇所が少なからずあるのも事実である。しかし、それは本書の価値に変化を与えるものでは決してない、査読システムの本質はどの国際誌でも同一だからである。

また、本書は論文作成上の研究者倫理を学ぶ上でも有用で、「論文の不正は研究の不正 (2.4節)」や「二重投稿 (3.3節)」、「誰が共著者になれるのか (4.1節)」などの内容を含んでいる。さらには、査読者としての倫理にきちんと触れているのも本書の特色の1つである。昨今、所謂「STAP細胞問題」などを踏まえ、各大学や研究機関で研究倫理への取組が強化されている。研究倫理に関する講習会で本書を参考書に加えれば、論文著者・査読者としての倫理と同時に、研究論文に関わる他の多くの側面も学ぶことができ、まさに一石二鳥・三鳥であろう。尤も本書の主題は研究倫理ではないので、その部分に関しては講師が適宜補足することが望ましい。

実は、本書を知ったのは、廣田 勇先生 (京都大学名誉教授) から頂いた一通のメールであった。実際に

本書を手に頁をめくりつつ、多くの頁では頷きながら、またある頁では驚きを感じながら、繰り返し読んでしまった。そして思った。何故こうした本がもっと早く世に出なかったのかと。これまで先輩研究者からの助言を頼りにしつつも、半ば手探りで自らの経験を通じて会得してきたことが、本書を読んでその全体像が立ち所に見えてきたからである。

それでも、論文投稿の経験のない大学院生にとっては、実感が湧かない箇所もかなりあろう。だが、大事なことは、本書を手掛かりに、とにかく積極的に論文を執筆し、投稿してみることである。一連の過程を経

験することで、本書の内容もより実感をもって理解できるであろう。一方、既に何編かの論文の執筆経験がありながら最近論文出版のペースが上がらない研究者も、是非本書を手にとって欲しい。第1章には、日本発の研究論文がここ10年減っているという憂慮すべき統計が示されている。折角良い研究をしたのなら、その成果を論文として積極的に発表し世に問うて欲しいという、著者から若い世代への激励の書と受け止めた

(東京大学先端科学技術研究センター 中村 尚)